

奥更谷古窯址の調査報告

—東備西播有料道路建設に伴う—

1975・3

邑久町教育委員会

東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会

前　　言

岡山県南新産業都市と播磨工業整備特別地域を結ぶ産業開発沿線の観光開発を狙う、東備西播開発有料道路は、国営事業として県開発公社によって計画がなされ、工事も着々と進められております。

一方、こうした開発から文化財を保護することも、祖先からの伝承を受けついで今日ある私たちにとって大切な責務であります。

ついては、あらかじめ 1972 年に同建設区域の埋蔵文化財分布調査を実施し、種々保存協議を進めたのち、まず尻海新林（宮山）の窯跡の発掘調査を実施いたし、その概要を刊行いたしましたが、これに引き続き、奥更谷古窯址の報告書をとりまとめることができました。

この調査や刊行にあたりまして考古学研究者、県文化課、県開発公社、調査委員会、地元関係者等のご指導、ご協力に対して心からお礼を申しあげます。

昭和 50 年 3 月

邑久郡邑久町教育委員会

教育長 宇津木助雄

例　　言

1. この報告は、東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会が岡山県道路公社より受託して実施した奥更谷古窯址の発掘調査事業の概要である。
2. 上記委員会は、邑久町教育委員会に設置され、後述するとおり一切の事務的対応を果した。
3. 調査は、岡山県教育庁文化課文化財保護主事　葛原克人、同枝川陽を担当者とし、昭和49年7月19日から3日間の工程で終了した。この間、邑久町教育委員会教育長　大森勝、同社会教育主事　木下督士、邑久町文化財保護委員　川崎務、元玉津公民館長　心光敏一、現館長　神坂久吾など諸氏の応援をえ、時実黙水氏の来跡もあり、直接間接を問わず有益なご教示をえることができた。記して厚く感謝の意を表したい。
4. 遺跡・遺物の実測・製図・執筆・編集は葛原があたった。
5. 小報に示す高さの数値は、海拔絶対高である。

目 次

前 言

例 言

第1章 調査の経過.....	1
第2章 邑久の古地形.....	3
第3章 奥更谷古窯址.....	6
第4章 まとめにかえて.....	11

図 版 目 次

第1図 邑久の古地形.....	4
第1表 邑久郡郷名表.....	5
第2図 奥更谷古窯址位置図.....	6
第3図 窯体 平・断面図.....	8
第4図 須恵器実測図.....	9
第5図 須恵器甕拓影.....	10
第6図 窯体写真.....	13
第7図 窯体部分写真.....	14

第 1 章 調 査 の 経 過

東備西播道の建設は、当所、岡山県の東側と兵庫県の西側を結接する幹線道の敷設によって、産業および観光のいっそうの発展をめざす目的をもって計画決定されたものである。昔時の国名、備前および播磨にちなみその東端と西端をむすぶところに所以して「東備・西播」の名と命名されたようである。この岡山県分の実施設計ならびに施行主体は岡山県道路公社で、事業主は、建設に先立ついわゆる事前調査の中で特に埋蔵文化財の処置に配慮し県教育委員会のこの種の主幹課である文化課と数次にわたって協議を重ねてきた。その間、県教育委員会にあっては、昭和46年度事業として、国庫補助金をうけて事業計画の周辺一帯にわたる分布調査を事前に実施し、その成果を刊行してきたところである。⁽¹⁾ 分布調査にあたっては、岡山県遺跡保護調査団ならびに沿線地教委の協力をえて、数十名の調査員が数名の班編成によって全路線をくまなく現地踏査した結果、ようやく文化財保護の第一歩、遺跡の分布状況をとらえることができたのである。ここに報告する窓址は、分布調査事業に伴い高約40mの山林の中へわけ入り西川宏・川崎務両氏などの班が淡い灰層と須恵器片の採集をよりどころとして、新規に発見された窓址である。両氏をはじめ分布調査事業に参加いただいた研究者各位に深く感謝の意を表したい。その後、岡山県教育委員会にあっては、あまつさえ中国縦貫道建設に伴う遺跡の処置におわれ、そのうえ民間開発の急増などによる膨大な事務量をかかえて諸経費の執行についてすら極限状態にあったため、本事業にかかる事務局は当該地教委に依頼するという方法をとつて対応することとなった。邑久町教育委員会は、ただちに「東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会」を設置し、事務的・経済的任務の完遂にあたり主として木下督上社教主事の手をわざらわしたこととを記し感謝の意を表すしだいである。そして、現地の発掘は、上記調査委員会から派遣要請を受けた岡山県教育庁職員 萩原克人、同枝川勝が、地元の協力をえて昭和49年7月19日から21日までの3日間を要して完掘したところである。問題は、分布調査事業について広く研究者各位によりかけてその主導の下に基礎的作業を果してきたにもかかわらず、発掘事業に対する取り組みにあたっては、まったく研究者側に協議することなく行政サイドの独断的な対応に終始した点である。一事業にかかる一環した意見聴取を、行政側が一方的におこなったことは、研究者側と行政側との間に介在するある種の信義にかかわる問題であり、研究者側から強く指摘された点で、今後充分配意したい事柄である。

とりあえず、調査委員会の規約および構成を示すと、次のとおりである。

東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会規約

(名称及び設置目的)

第1条 邑久町事業地内における埋蔵文化財の調査業務を行なう目的として、東備西播道埋蔵文化財調査委員会を設置し、併せて同調査事業の円滑な運営をはかる。

(組織及び事務局の所在地)

第2条 この委員会は県及び町教育委員会、文化財保護委員、学識経験者、その他関係者をもって組織し、事務を処理するため、事務所を邑久町教育委員会におく。

(役員)

第3条 この委員会には次の役員を置く。

委員長	1名
副委員長	1名
委員	若干名
幹事	2名
監事	2名

2. 委員長は委員会を総理し、委員会を代表する。
3. 副委員長は委員長事放あるときは、委員長の職務を代行する。
4. 委員は委員会の運営にあたる。
5. 幹事は委員会の事務を担当する。
6. 監事はこの会の会計を監査する。

(事業内容)

第4条 委員会は第1条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

- ・遺跡地について精査し、遺跡の種別規模、性格など重要性を確認する。
- ・遺跡調査記録を作成する。

(調査)

第5条 委員会は調査の実施にあたっては、別に調査団を編成して実施する。

(解散)

第6条 委員長は委員会の事業目的が達成されたと認めたとき委員の同意を得て、委員会を解散する。

付則

この規約は昭和48年8月31日から施行する。

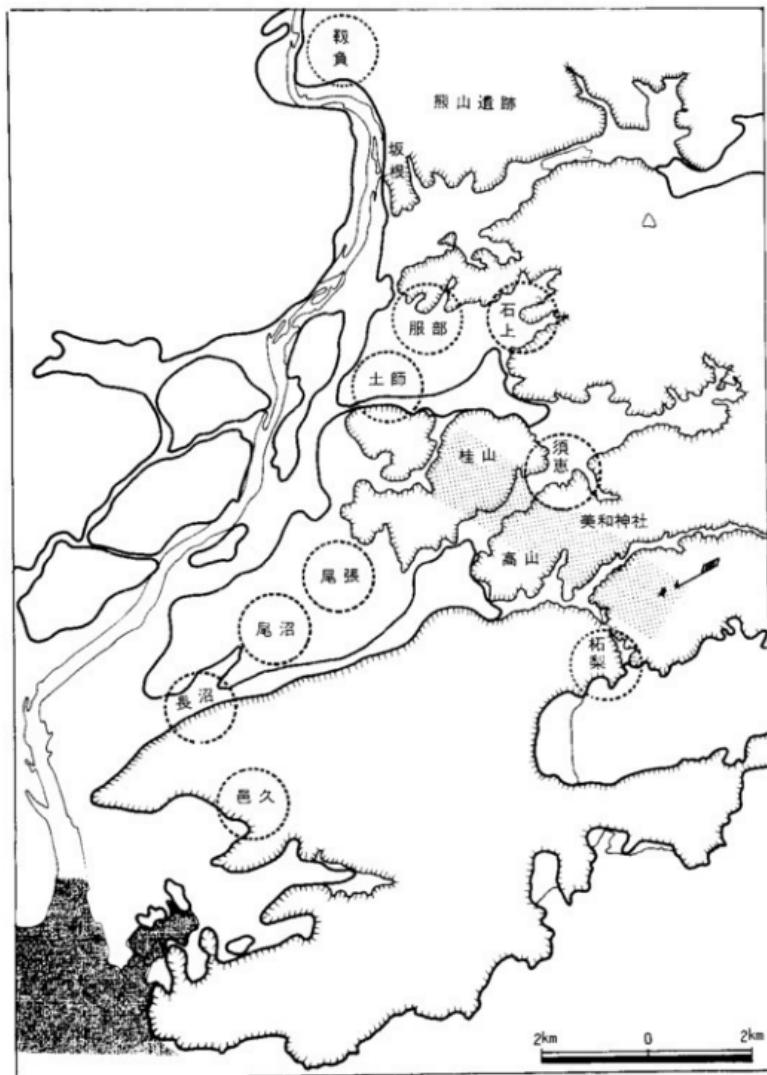
東備西播道埋蔵文化財包藏地調査委員会委員名簿

氏名	役職
委員長 大森勝	邑久町教育長
委員 小林孝男	県教育庁文化課長
〃 家野富太	邑久町文化財保護委員
〃 川崎務	〃
〃 太田嚴	〃
〃 山佐峰章	〃
〃 谷祐遵	〃
〃 黒原裕	町教委庶務課長
幹事 西口秀俊	県文化課參事
〃 木下督士	社会教育主事
監事 馬場良策	邑久町議會議員
〃 清水肇	邑久町役場開発課長

第2章 邑久の古地形

邑久郡は、東と南に海、西に大川、北に雲山熊山の余脈を臨む。沿岸東部一帯は播磨灘、南部はみはるかす瀬戸内海、西部は吉井川の河口および児島湾によって画される。県下の5分の1を占める海岸線は、潮流によってえぐられ屈曲に富み、その形状が良好な停泊地を呈している。虫明湾、間口湾、知尾湾など古歌にうたわれた湾は枚挙にいとまがない。たとえば、「続日本紀」の大平15年条には「備前国言。邑久郡新羅邑久浦源一着大魚五十二隻。長二丈三尺口下。一丈二尺已上。皮薄如紙。眼似米粒。聲如鹿鳴。故老皆云。未嘗聞也。」⁽¹⁾ とみえ、邑久浦付近に鰐またはいるか類の大群がおしよせ、故老すら聞いたことのない魚類であることに驚き、備前国司をして希有な出来事として言上せしめている。このことは、一帯の湾が漁船や機帆船にとって格好な停泊地であったことを伝えると同時に、古代日朝関係史を秘めた内海航路の泊として重要な位置を占めていたことをうかがわせる。一方、邑久郡の山並は、牛窓町の阿弥陀山を主峰としこれにつづく入雄山脈および玉葛山脈が背稜を形成して、郡内を山北と山南に二分する。黒井山、玉葛山、四辻山を連ねて南西に走る玉葛山脈の余脈として桂山山脈が郡のほぼ中央に隆起している。岩質は流紋岩を基盤となし、その風化土の上に常緑広葉樹のクロマツが繁茂する植生を示している。⁽²⁾ これが窯業の生産工程で消費される膨大な燃料の宝庫であったことはいうまでもない。郡の北部と東部が山岳地帯であるのに対し、中部から西部にかけてはおおむね肥沃な平坦地で千町平野、山南平野が形成されている。これら平野を養う水路は、主として大用水（幸島用水）、千田川、千町川の3本の幹線水路である。大用水は、吉井川の分流で備前市坂根一の口から長船へめぐり南に流路をとりつつ豊原から西大寺神崎に至る。「本用水は幸島新田干拓後の用水として従来の水路を改修し、或は新水路を開鑿して作成したるもの」⁽³⁾ であるが、その開拓はかなり古くまで遡る可能性が強い。⁽⁴⁾ 千田川は、長船町飯井荒池を水源池とし、国府、笠加まで西流し、ここから南西に流身をとりつつ福田、今城を経て吉井川にそそぐ流程約14.3kmの水路である。千町川は、水源池を尻海三谷池に発し庄田の水流を合わせ、西須恵から豊原、今城、神崎へ至り吉井川に流れ込む流路である。「千町平野ハ昔時沼澤地ナリシモ、……宝永三年時ノ志士本村梶原六三郎深ク之ヲ憂へ種々腐心シタル結果、……遂ニ其目的ヲ達シ溝水一時ニ流ドシテ、所謂千町平野ノ沃田ヲ見ルニ至リシト云フ。」⁽⁵⁾ したがって、少なくとも18世紀頃までは、一面が滯水状況にあり、津田永忠なども塩害を防止するための築堤工事を試みているところから、古代にはこの河道を含む一帯は海水の侵入のあったという想定がなされよう。古地形を復原すると第1図のようになる。

こうした地勢を示す古代邑久郡は、「和名抄」「続日本紀」などによると、邑久郷、朝負郷、土師郷、須恵郷、長沼郷、尾張郷、柘梨郷、石上郷、履部郷、杯郷（刊本のみ）な



第1図 邑久の古地形

邑 久 郡 郷 名 表

(表-1)

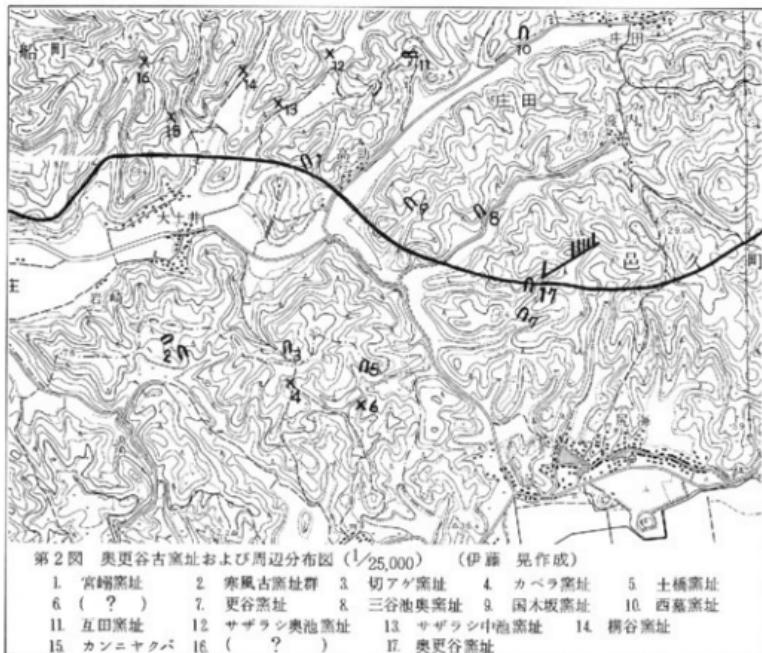
	和名抄 郷名	比定地
邑 久 郡	邑久(於保久)	岡山市西大寺邑久郡
	朝負(由計比)	赤磐郡瀬戸町弓削
	土師(反之)	邑久郡長船町土師
	須恵	邑久郡長船町東須恵・西須恵
	長沼(奈加奴)	岡山市西大寺長沼
	尾沼(乎奴)	邑久郡邑久町大窪・仁生田
	尾張(乎八利)	邑久郡邑久町尾張
	柘梨(都奈之)	邑久郡牛窓町小津・栗利郷
	石上(以曾乃加笑)	邑久郡長船町磯上
	服部(波止利)	邑久郡長船町服部

ど、10郷ないし11郷からなっていたようで、そのうち、平誠宮出土木簡文書⁽²⁾によれば、邑久、尾沼、尾張、石上の存在が確実である。これら郷名にもとづき、現在の行政単位と比較し、その比定地を示すと別表①のとおりである。また、「舊事本紀」に大伯国造、「齊明紀」に大伯海、大伯皇女などの記事が散見される根拠をもって「邑久」は「大伯」と同一の表記法であるといわれる。⁽³⁾ あるいはまた、岡山県立博物館の館蔵品の一つである須恵器平瓶には肩部に「大久」の線刻があり、⁽⁴⁾ 菩提の機会を得てない別の須恵器にも「大久」と刻まれた事例が実存するという。⁽⁵⁾ これらはすべてオオクまたはオークとして呼称された地域にかかる歴史的表現の様々な表われにほかならない。そして、備前國オークの柱山山塊の南西緩斜面から高山・美和山の山裾にかけて40基以上の窯址が所在し、古代の一大窯業地帯を展開しているのである。

第3章 奥更谷古窯址

第1節 窯址の位置

邑久古窯址群のあり方は、巨視的にいえば、長船町桂山と邑久町尻海をむすぶ直線上、ほぼ北西から南東方向をさすベルト状に群集するが、本窯址はその南端近くに所在する斜床窯の須恵器窯である。その立地は、千町川水系の上流に属する高助部落から南東約2km、標高約40mの部位にあり、眼下に谷筋をおさめる場所にあたる。尾根線にはば直交した方位をもって構築された単独の本窯址は、中更谷古窯址と隣接し、谷を隔てた更谷古窯址群ともきわめて近接した位置にある。これら窯址および窯址群は、ほとんど同一の時期に形成されて一群をなしている。また、すでに報告のあった宮崎窯址⁽²⁾を含む高助窯址群は、距離関係・時期的相異などによって別の窯址群を構成するものと考えてよい。



第2図 奥更谷古窯址位置図

第2節 窯体の構造

窯体の残存状況はきわめて劣悪で、天井部はすべて崩落しその痕跡すらとどめず、側壁の残存高は最も良好なところで約60cmを測るにすぎない。窯体の容量を推しはかるための立体的な復原の手掛りが欠落しているばかりでなく、平面形態についてすら、本来、窯体の下方にあるべき燃成室・焚口・前部など主要な部分がまったく消滅し、破壊度はそのうえさらに、焼成室の下半部にまでおよび残存窯体下端は煙状にえぐり取られている。加えて、焼成室床面中間部は煙地の開墾によって2次的に分断され、通常みられる状態として床面および側壁を検出することができなかった。非連続の状態で検出した窯体の残存長は水平距離にして約4.7mを測り、その数値は、普通的な窯体長の2分の1強にあたる。かろうじて残存した窯体の煙道直下の床面は、平均幅80cmで青灰色の色調を呈し、黄褐色の地山面と鮮明に後別しうる。両側に約10cm幅でめぐる側壁は、外方に約5cm幅の赤褐色ヘマタイト、内側に灰青色マグネタイトをみとめるが、酸化したマグネタイトはかならずしも全体をめぐることなく剥落した部分が多い。窯体の立ちあがりはわずかに5cmないし20cmをとどめるにすぎない。床面は少くとも2回以上の補修がなされている。そして、床面は約1mの中間消減部をこえて下方の残存焼成部にいたる。そこは、長さ約2.2m、平均幅1.3m、平均傾斜角20度で、側壁は5cmから60cm程度をのこしている。床面の厚さは約10cmを測り、上半部5cmは灰色または灰白色に酸化し下半部は赤褐色に還元して、全体的に固く焼けしまっているが、複数の操業を示す安定した床面は看取しえないので、この窯体については、煙道直下における部分的補修があったものと思われる。窯体側壁内面は、一様になめらかな面としてでなく、粘土塊をおしつけたような激しい凹凸がみられる。

第3節 出土遺物

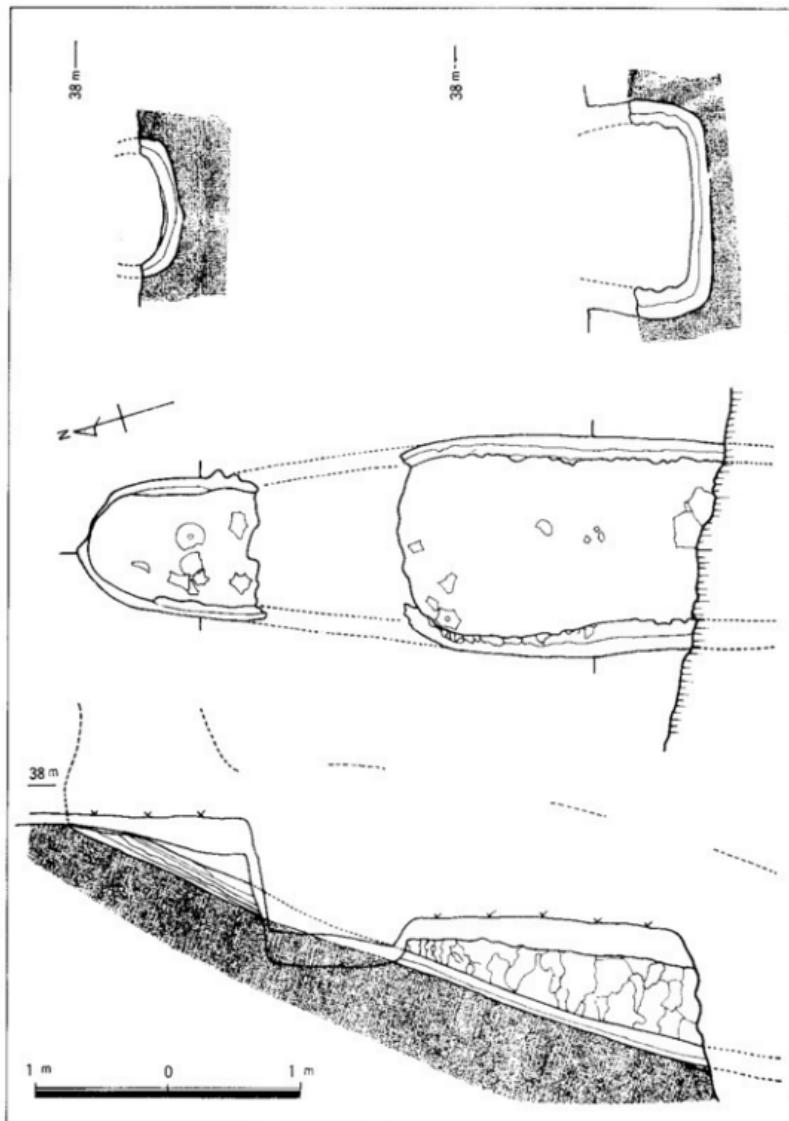
窯址の発掘調査は、ふつう灰原を伴うため膨大な量の製品もしくは半製品の出土を常とする。本窯址例の場合、限定的な窯体内の調査におわったため、出土遺物は須恵器の蓋杯、杯身、甕または壺の器形にかぎられる。

蓋杯（第4図 1～12）

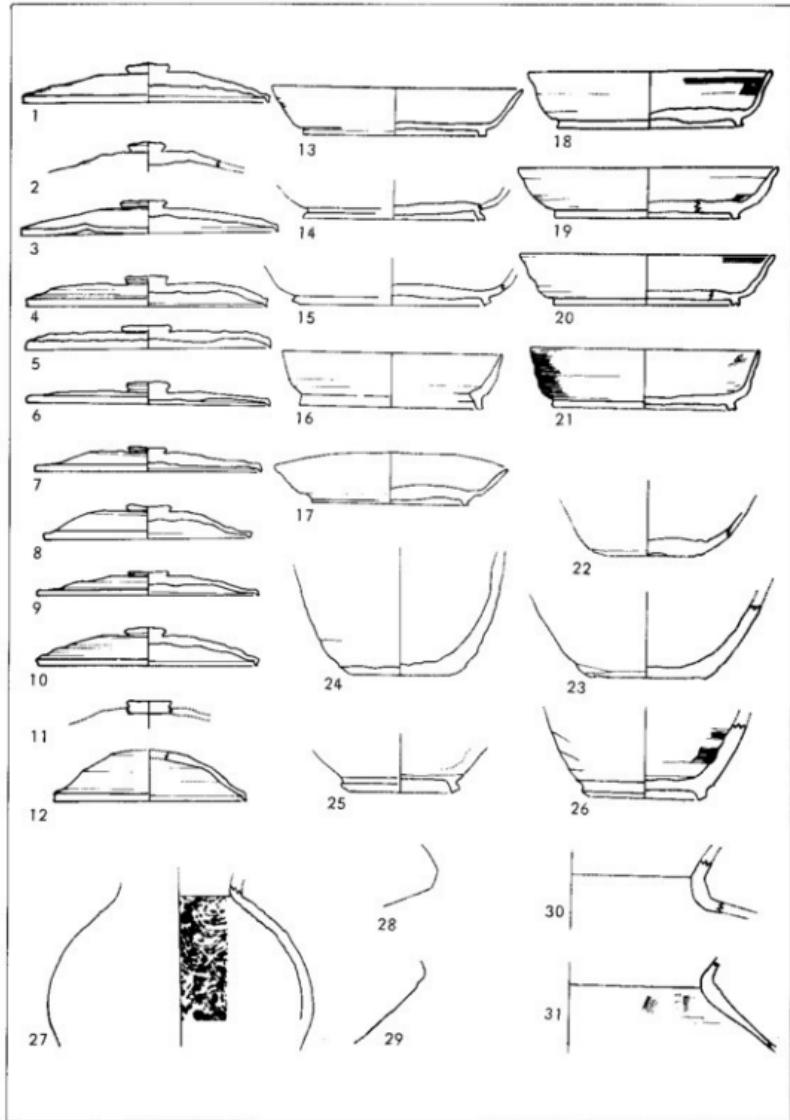
偏平なつまみを付けた蓋杯は、おおむね灰白色を呈し、口径は15.8cmから19.6cmのうちにあり平均18.8cmで、器高はつまみ部を含め1.6cmないし2.9cmである。全体としてきわめて偏平なプロポーションといえる。口縁は、ほぼ直角またはやや外方へ短くつまみ出されて屈折し口唇はやや尖形を呈しておわる。体部のヘラ方向はすべて時計の針の逆回りを示し、整形痕はていねいで、微量の砂粒を含むとはいえ胎土も良好である。4mm～8mmの低い基石形のつまみは、頂部がほぼ平坦なものが多く、縁は丸味をもっている。

杯身（第4図 13～21）

底部に貼り付け高台をもつ杯身は、口径16.8cm～19.2cmで器高約4cmをはかる。底部と体部との屈曲はそれほど鋭角的でなくやや丸味をもち、底部屈曲線から内側へおよそ5mm程度はいった所に高台が付く。高台は短かくやや外方へふんばった形状である。内外面ともに横ナデ整形の跡がみられ、蓋杯と同様、整形工具の方向は逆回りである。



第3図 窟体平・断面図



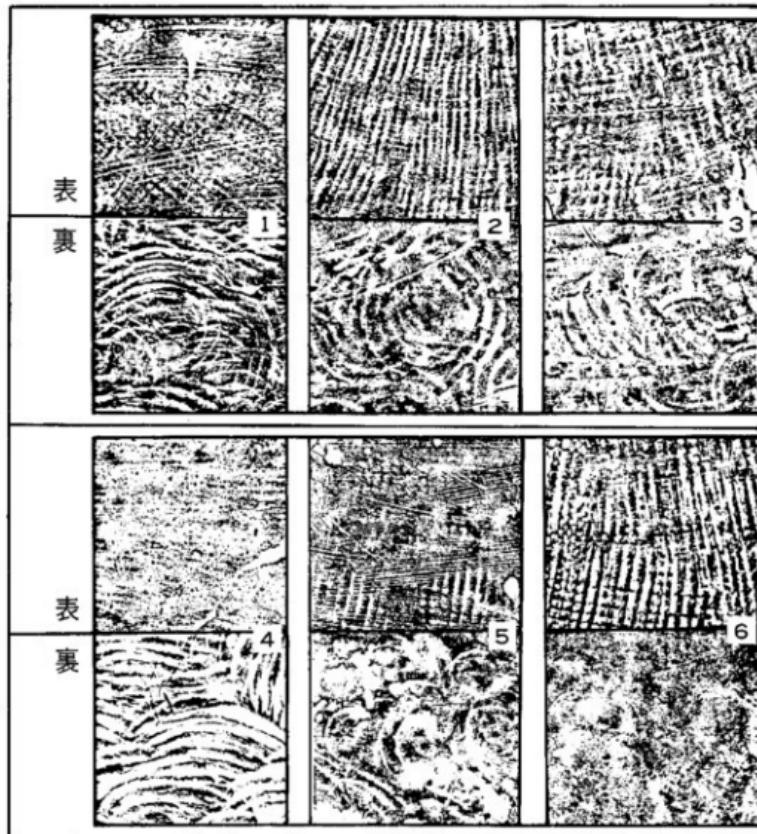
第4図 須恵器実測図 比尺(1/4)

壺 (第4図 22 23 24 28 29)

底部整形はヘラおこし手法で、糸切りのものは一片もない。底部はかならずしも平坦でなく、底部と体部との屈曲部には荒いヘラ切りの跡をとどめ、内外面には横方向にヘラの調整痕が認められる。胴部以上の形態は不明であるが、内面に青海波叩きのあるものとそうでないものがあり、外側の叩き板原体も各種ある。

壺 (第4図 25 26 27)

底部は、斜め外へ張った短かい高台を有し、体部には粘土輪積みの痕跡とヘラ整形のあとをのこしているが、体部以上の形態が不明。27のように内面に青海波をもつ球形に近い胴部の壺もみられる。



第5図 須恵器壺拓影 縮尺(1/2)

第4章　まとめにかえて

まず、出土遺物の比較検討を通じ窯業および操業の時期について触れなければならない。前章で各器形の形体的手法的特徴を記してきたが、わけても蓋杯・杯身は年代決定の重要な指標となる。蓋杯のつまみの形態、杯身高台の位置関係、比較的規格化に富む点などを視野におき、近接の窯址例のものとくらべると、宮備窯第Ⅲ類に酷似し⁽¹⁾、寒風3号古窯址⁽²⁾のそれよりやや後出的な要素がある。たとえば、杯身高台の高さや位置が若干相異している点をあげれば、いまは充分であろう。それはまた、備中二子御堂奥古窯址例⁽³⁾の第4期に相当する。畿内に例を求めるとき、陶邑古窯址群中のM T 21、T K 7⁽⁴⁾ および平城宮 S D 650 須恵器⁽⁵⁾などに同種の器形がみられる。これら類例から導かれる本窯址の操業年代は8世紀初頭と考えてまず誤りはない。

本窯址をふくむ邑久郡一帯の窯址群の、主として灰原からの採集遺物は、邑久考古館、牛窓町教育委員会、吉備考古館などに多数保管されているが、管見のかぎり6世紀代のものは僅く少量で7世紀代から8世紀代のものが圧倒的多数を占める。この期における陶邑古窯址群の基數は相対的に減少する潮流を示し、これと反比例して地方窯としての邑久古窯址群などが7世紀中葉以降急激に増大する傾向がみられる。とりわけ、宮崎古窯址出土の、白鳳期に位置づけられた劍菱形鶴尾⁽⁶⁾などは、備前、備中、美作一円に所在する古代寺院址からの出土例は皆無で、おそらく中央の寺院創建勢力からの別注によって焼成された可能性を秘めている。

やがて、「延喜式」（主計上）⁽⁷⁾にみられるとおり、陶器を調貢すべき限定された六国の一に備前國が挙げられる。その候補地としては先学の指摘どおり⁽⁸⁾ この邑久郡一帯の、しかも佐山地域をおいて他にない。佐山は、本窯址の立地する場所から北東約2kmにあり、そこから出土して現在県立博物館に保管されている長首壺などは白土を用いたみごとな形で、色調の点を除けば、まさに青銅品にみまうばかりの品である。古代オークは窯業の邑といえる。古地形にもとづくオークは湾や入江がいたるところにあって、邑久で焼かれた陶器は、海路を通じ容易に遠隔地まで運搬されたに相違ない。

註

- (1) 岡山県教育委員会「東備西播開発有料道路建設区域埋蔵文化財分布調査概要」1972
- (2) 黒板勝美「続日本紀」前編『國史大系』吉川弘文館 昭和46年

- 富岡敬之氏に教示される点があった。深謝。
- (3) 光野千春、大森尚泰「岡山県地質図説明書」岡山県 昭和 38 年
文化庁編『天然記念物緊急調査一植物図・主要動物植物地図一岡山県』
- (4) 岳久郡史刊行会『岳久郡史』上巻 昭和 28 年
- (5) 泉本知秀「船山遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 岡山県教育委員会 昭和 47 年
- (6) 前掲『岳久郡史』中に「千町川沿岸排水改良事業概要」を集録。 P 63
- (7) 池辺 弥「和名類聚抄郷名考証」吉川弘文館 昭和 47 年
- (8) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』V 「平城宮木簡」— 昭和 44 年
栗野克己氏の手をわざわざした。深謝。
- (9) 長光徳和、三好基之、前田 幹など諸氏のご意見を賜わった。深謝。
- (10) 山陽新聞社刊『古代の形』 昭和 48 年
- (11) 三好基之氏の教示によるが、県博の館蔵カードによると、和気町和氣神社に所蔵され、横穴式石室から出土したという。
- (12) 伊藤 覧「新林(宮崎)窯址の調査報告」東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会 昭和 49 年
- (13) 註(12)と同じ
- (14) 西川 宏「備前の古窯」『古代の日本』4 中国・四国 角川書店 昭和 45 年 P 301
- (15) 葛原克人・池畠耕一「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 2 集
岡山県教育委員会 昭和 48 年
- (16) 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』 I 1966
- (17) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』 VI 昭和 49 年
- (18) 高橋 譲、伊藤 覧両氏に注意を喚起された。深謝。
- (19) 黒板勝美編「延喜式」中編『國史大系』吉川弘文館 昭和 49 年
- (20) 間壁忠彦「備前の古窯」『古代の日本』4 中国・四国 角川書店 昭和 45 年 P 305

